

福部の伝説

縄文時代 弥生時代 古墳時代 飛鳥時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代 室町時代 江戸時代 明治時代 大正・明治・昭和時代

福部に昔から言い伝えられている6つの伝説

地域	伝説
湯山	<p>多鯨ヶ池の伝説</p> <p>昔々、国府町長者さんの元に新しい使用人としてお種という女性がやってきました。夕方、使用人たちが集まり話していると誰かが「腹減った」「うまいもん食いたな」と言うと決まってお種さんが甘い柿の実を持ってきてくれます。</p> <p>最初はうまいうまいと言っていたのだが、そのようなことが何度かあると「柿、出過ぎじゃね?」と疑う者も出てきます。そこである時、お種さんをつけてみることにしました。</p> <p>するとお種さんは池の岸辺で白蛇に変身し、池の島へと渡るとその柿をもいでいたのです。驚いてそれを長者に報告すると、それ以降、お種さんが戻ることなく多鯨ヶ池の主となったそう。</p> <p>そして、長者の家に住んでいた老婆が、それを哀れみ池の傍に荒神さんの社<small>（現在のお種社を建てて祀ったそうです。その社は「お種社」として弁天宮とは別に祭られています。</small></p> <p>柿を取ったとされる島は、池の中程にある「小島」でお種社は大島の小島を望む場所にある。</p> 
細川	<p>名馬池月の伝説 鎌倉時代・1200年代</p> <p>日本海に面した因幡富士と呼ばれた美しい山駟馳山がある。</p>  <p>昔、この山に一頭の馬がいた。母親を早く亡くしたので、この馬は、母を探していつも山中を走っていた。ある時は勢い余って頂上から飛び降りた。</p> <p>こうして自然に水泳を覚え、健脚にもなったので、土地の豪族から源頼朝<small>（みなもとのよりとも）</small>に献上された。</p> <p>そしてこの馬が宇治川先陣争いで佐々木高綱<small>（たかつな）</small>の乗る「名馬池月」となった。</p> <p>この名馬が死んだ後、佐々木高綱は因幡の守護職となった。</p> <p>かつての恩のある馬の霊を慰めるため1日、駟馳山に立ち寄ったという。</p> <p>今でもこの山の頂上付近には、池月ゆかりの駒が池の跡があり、ふもとののは飛び下時に足跡のついた石が残っている。</p> <p>山の名前も馬偏の字を用いて、名馬池月を産したことを記念している。</p>

箭溪

(矢谷)

やまんぼ めのさらし
山姥の布晒の伝説

箭溪の背後には、魔尼山があり山の頂上付近に村から見える大きな岩がある。
人と呼んで「^{ゆるぎいわ}動岩」という。



もう一つはこの山の奥の院に「^{たていわ}立岩」という大きな岩がある。
さらに隣の村の栗谷には立岩山があつて頂上近くに「^{めのさらし いわ}布晒し岩」という巨石がある。
これら三つの岩は「^{やまんぼ}山姥」が住んでいて、三つの巨石に布を引き渡し、晒ておいた。
昔晒した布から^{あく}灰汁が滴り落ちて、大きな岩にあなを開けた。
この岩は箭溪の西の小字「小谷」の奥にあり、今でも、くぼんだ所にたまる水は、灰汁のために白く濁るとか、この岩ののことを「あくたれ岩」という。

蔵見

鶏岩の伝説

蔵見の小字「^{よんだんだ}四反田」に、^{とりいわ}鶏岩という巨石がある。
高さ6mくらいのおむすび形のいわである。
この岩の中に金の鶏が棲んでおり、一年に一度、それもたったの一度鳴くという。
この鳴き声を聞いた者は^{ぶげんしゃ}分限者（お金持ち）になると言われ、村人はありがたい^{れいせき}靈石として崇敬している。



左近

^{まつかぜ} ^{むらさめ}
松風・村雨の伝説 平安時代・600年代

昔、在原行平は、因幡の国守を拝命し任国（赴任先の因幡へ行く）へ下った。途中、須磨の浦で美しい姉妹「松風・村雨」を見そめ、因幡へ同行させて。そして4年間、因幡山のふもとで楽しい生活を送ったが、任期満ちて行平は京へ戻った。その後、松風・村雨の姉妹は、思い出だけを生きがいにして、左近の部落に人目を避けて生涯を送えた。
左近の旧家「村田家」では位牌を祀っている。



平安時代、須磨に暮らしていたという伝承上の姉妹。姉が松風、妹が村雨。

細川

^{つうげんおしろう}
通幻和尚誕生の伝説 (^{つうげんじやくれい}通幻寂霊) 南北朝時代・1320年代

岩美町浦富に通幻和尚の母親の墓があった。
昔一人の僧が、諸国遍歴の途中細川を通った。
すると、新しく築いた墓に塔婆が一本立ててある。
これは最近亡くなった人の墓かと哀れみ、経を読み、手向けをして、しばらく墓の前で休んでいると、どこからともなくかすかに赤ん坊の泣き声がする。
不思議に思い回り辺りを見回したが、それらしき幼子の姿はどこにも見当たらない。
ところが、よくよくその鳴き声を確かめてみると、今しがたお経をあげた墓の下から聞こえてきた。
驚いた僧は、大急ぎでむらにやって来て、その墓の主のこ事情を聞いた、
「これは、わび住まいをしていた女の墓で、難産のあげく途中で亡くなったから、昨日ここに葬った」という。
さては、その胎内の子が生まれ出たのかと、村人と相談して、その墓を掘り起こしてみた。
案の定、産まれたばかりの男の子が土中で泣いていた。

抱きとって近くの田んぼの水で洗い、母親の遺体は元通りの墓に埋めた。
僧は深い仏縁によるものと考えて、この男の子をもらい受けて養育した。
弟子にして、仏祖の法を継がせようとしたところ、期待通りの立派な僧となった。
日本宗洞禅の開祖道元禅師の宗風を再興し、名声四海（天下に名をはせた）に鳴り響いた「通幻和尚」が彼である。

